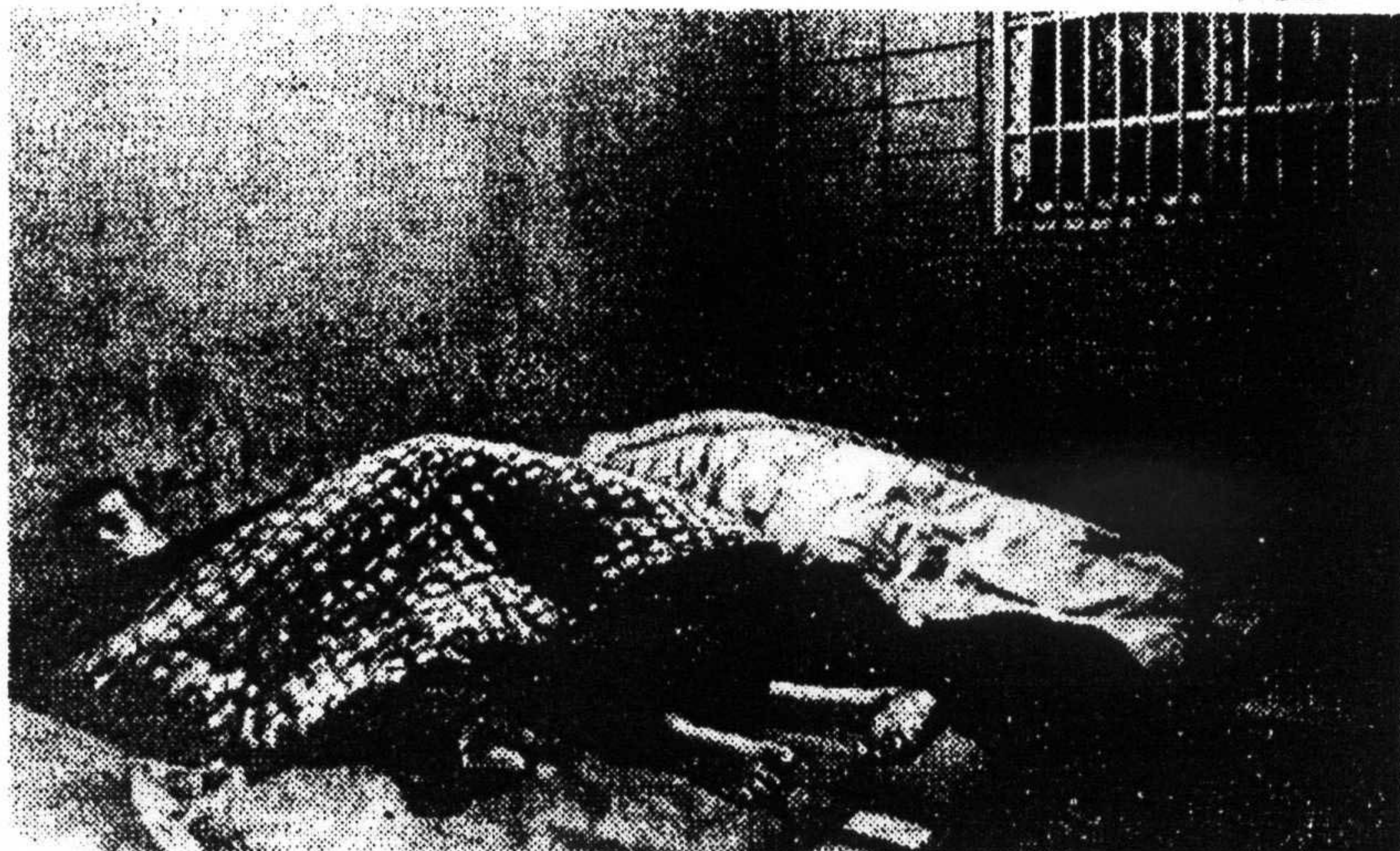


精神病棟

1
檻 (おり)



「我邦ノ精神病者ハ美ニ此病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ、此邦ニ生シタルノ不幸ヲ重ナルモノト云フベシ」
—日本の精神医学の父、故母秀三東大教授の大正七年の実態調査報告から。

まるで人間捨て場所

悪臭と寒気の中へ患者放置

「寝めして、アジの干物の頭を残した。私もちう頭を食へないとかった瞬間、患者たちの間で奪い合いが始った。東京のある精神病院。私はアル中患者として二月初旬に入院した。三週間は居るつもりで、入院だ、入院だ。」

「一分足らずの診断で、ニセ患者は、入院を必要とする重症患者に変わった。保護室に入れられた。広さは約三畳、入った色に染色した壁に、

「全く留置場よりひどく、寒いし、臭い。サツなら、水くねーってとねれば、看守が持つてくらあ。おっさんは続けた。ここじゃ、水一ぱい自由にならねえ。金はホテルなみに取るのによお」

「たれか食へませんか」といったとたん、三人ばかりがワツと食欲がない。食がたき込み届く、連日の冷えと運動不足で

「たれか食へませんか」といったとたん、三人ばかりがワツと食欲がない。食がたき込み届く、連日の冷えと運動不足で

りたつた。が、十二日目に精神づき果てた。退院の日、背中突刺さつた患者たちのまなざしを忘れることができない。彼らは、留置場、刑務所以下の生活をしいられ、いつ出られるとも知れない身だつた。最新刊の日本精神神経学会誌によれば、「患者を虐待する、狂つた精神病院」が多いといふ。私の入院先も、その例外ではなかつた。

「全く留置場よりひどく、寒いし、臭い。サツなら、水くねーってとねれば、看守が持つてくらあ。おっさんは続けた。ここじゃ、水一ぱい自由にならねえ。金はホテルなみに取るのによお」

「たれか食へませんか」といったとたん、三人ばかりがワツと食欲がない。食がたき込み届く、連日の冷えと運動不足で

「たれか食へませんか」といったとたん、三人ばかりがワツと食欲がない。食がたき込み届く、連日の冷えと運動不足で

ニセ患者すぐ入院

友人と妻に抱えられ、その朝、私は精神病院の門をくぐつた。かなり酔つていた。零細な印刷屋の長男、飲むとからみ、妻をなぐる、仕事もサボる、幻聴もあるらしい……こんな経歴のニセ・アル中だつた。専門医が診断すれば、

「全く留置場よりひどく、寒いし、臭い。サツなら、水くねーってとねれば、看守が持つてくらあ。おっさんは続けた。ここじゃ、水一ぱい自由にならねえ。金はホテルなみに取るのによお」

「たれか食へませんか」といったとたん、三人ばかりがワツと食欲がない。食がたき込み届く、連日の冷えと運動不足で

「たれか食へませんか」といったとたん、三人ばかりがワツと食欲がない。食がたき込み届く、連日の冷えと運動不足で

メシだけが楽しみ

入院六日目、保護室から大部屋へ移された。寝室、食堂、作業場を兼ねた四十五畳。患者二十五人。独房から出た身には、広く感じられたが、ろろ獄のふん臭に変わりはなく、火の気なく、窓にはサツた鉄格子、玄関に向う通路に、ぶ厚い鉄製のトビがあらる。

「たれか食へませんか」といったとたん、三人ばかりがワツと食欲がない。食がたき込み届く、連日の冷えと運動不足で

「たれか食へませんか」といったとたん、三人ばかりがワツと食欲がない。食がたき込み届く、連日の冷えと運動不足で

◇

病む心と医師がふれ合う所が病院であつて、ここは「病院」の名をかたる「人間の捨て場所」であつた。医師との接触はほとんどなく、入院したが最後、病状も退院時期もわからない、いわば不定期刑なのだ。もし、……もし逃げても失敗すれば救ふべきリンチが待っている。(大熊 一夫記者)

〈注〉入院したのは患者数約四百人の私立病院、医療関係者の評面では二流の下。厚生省出先機関から表彰されたこともある。

精神病棟



2 刑 私

電パチ先生は手に電氣シヨック療法用の二つの電極を握っていた。

「なぜ逃走した」「だれが計画したんだ」

問いつめながら、電極で花子のほおをなでた。ビリビリ

ッ。百球ほどの電流で感電させられるたびに、

花子は身をよじった。反抗的な態度は、一転して恐怖に引きつった。説教は続く。

「こんなことやられて気持ちいいかい」「悪いことやったと思わないの」

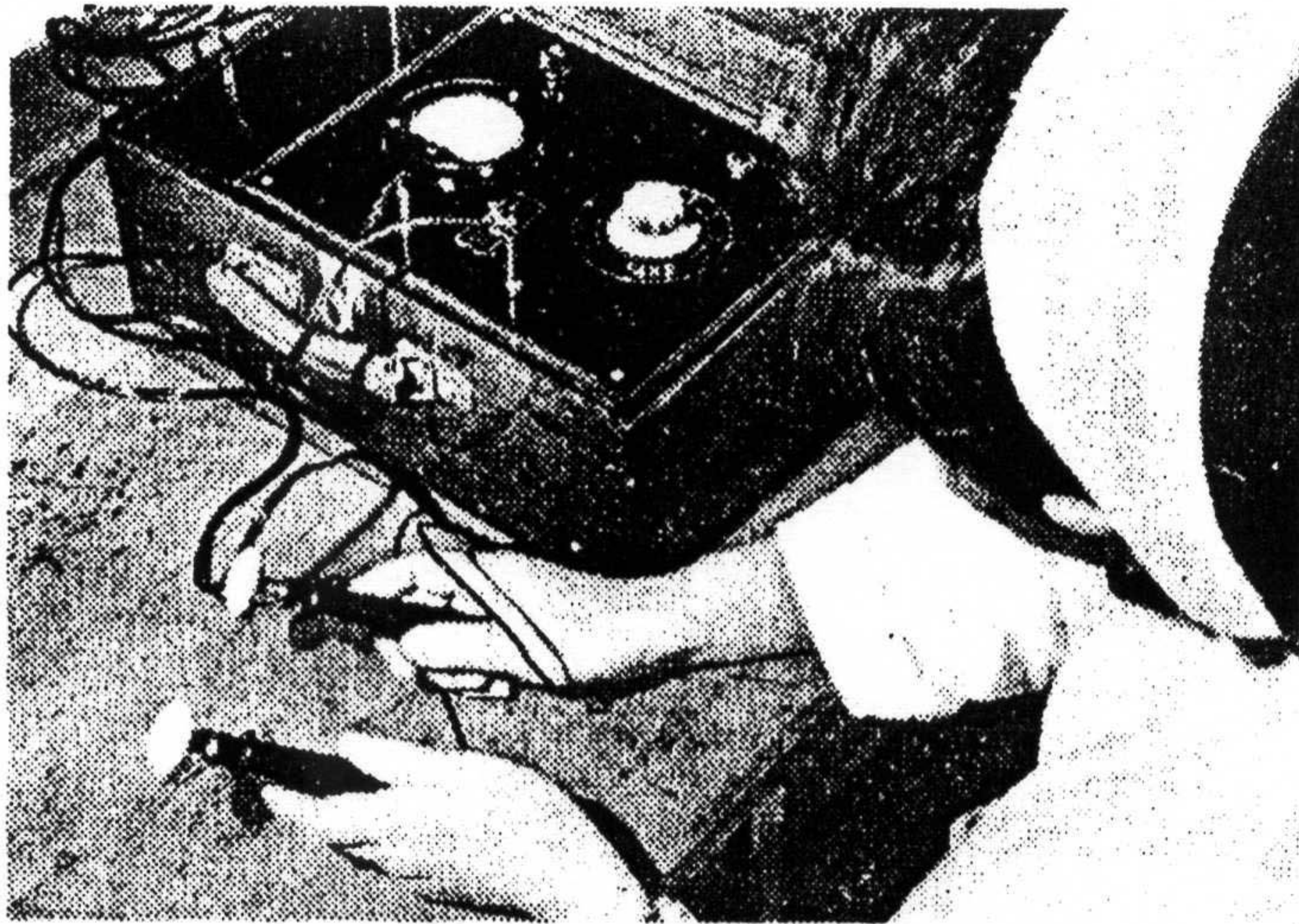
おびえる患者たち

その場には、主任看護婦はじめ職員五、六人がいた。二月十四日

朝、女子病棟(とう)保護室でのごとだ。「また電パチがあったぞ」といううわさが、その日のうちに

「電パチ」がこわい

寝小便にもお仕置き



やり入院させられた。十三日夜十時すぎ、逃走(離院)を図った。分裂症患者の雪子といっしょに。この日は妊娠五カ月の無資格看護婦が当直にいた。まず雪子が「歯が痛い」といって詰所にはいる。花子が「熱が出た」とい

ながら続いて詰所へ。看護婦は雪ルグツウをかませようとした。服をかけた。看護婦が悲鳴をあげた。隣室から患者がかけつけ、看護婦は助かった。二人は独房にぶち込まれた。雪子も、花子と同じように電パチの洗礼を受けた。

シヨックで吹飛ば

リンチその二。

電撃治療器、通称「電パチ」。使用法のなかに「ほおにつける」というのはない

シンナー売人の石橋は、去年十一月のある日、電車の中でシンナーに酔いつぶれ、駅から警察へ。警察からこの病院へ。入院数日後の雨の日、ふる場へ引率されて行く途中で逃げた。車の追跡をふり切って川に飛び込み、鉄条網をくぐり抜けた。四十分後、職員にかまいった。

それまで、彼は名前も身元も隠していた。電パチ先生は彼を保護室のたたみにすわらせた。「いいわないのなら、しょうがない」電極がほおにふれた。石橋はびっくりして、部屋のみみまで吹っ飛んだ。名前と身元をしゃべった。

焼いたピンセット

その三。

ある夜、悦夫を詰所に呼んだ。手には、先だけ焼いたピンセットを持っている。これをからだの数十カ所に当ててお仕置きした。悦夫の両腕や腹にやけどの跡が残った。見かねた一職員からの通報で八月三十一日、警察が調べ、証拠写真をとった。病院は患者の家族と示談で片付けて事件はもみ消された。

悦夫の寝小便はなおらない。焼きピンの看護人は、今も患者を小突いたり、どなりつけたりしている。

(以上は、入院中に患者たちから取材し、退院後、病院職員、警察関係者から事情を聞き、食えない部分だけつづった)

精神衛生法二九条に「知事の権限により、自傷他害の恐れがある精神障害者を、本人及び保護者などの意思にかかわらず強制的に入院させることができる」とある。花子も石橋も、確かに自らを傷つける恐れがあった。しかし警察が入院を強制できるのは、同衛生法指定病院に限られる。私が入院した病院は同法の指定を受けてなかった。

リンチする医師や職員こそ、

「他害のおそれがある精神障害者」ではないか。

(このシリーズの登場人物は仮名) (大熊 一夫記者)

病室中へ伝わった。「電パチ」は患者から最も恐れられているリンチであった。中西の事業家の娘、花子は睡眠薬中である。薬でふらふらして、子の口をのぞいた。その瞬間、花子ほうちろから看護婦の首をしめ、雪子は持っていたタオルでサ

知思遅れで分裂症の悦夫は、二十歳を過ぎたのに寝小便をする。腹を立てた看護人は、去年八月の

病室中である。薬でふらふらして、子の口をのぞいた。その瞬間、花子ほうちろから看護婦の首をしめ、雪子は持っていたタオルでサ

精神病棟



私が退院する前、暮れの清造じいさんの死は、辱め、ボロ布を片づけろと死を望む者ばかりで、不潔部屋にいた万作じいさんが死んだ。部屋をでるタンカの上で、万作さんは虫の息だった。見送るなかでたれがががぶわいた。「この部屋の掃除じゃなあ……」

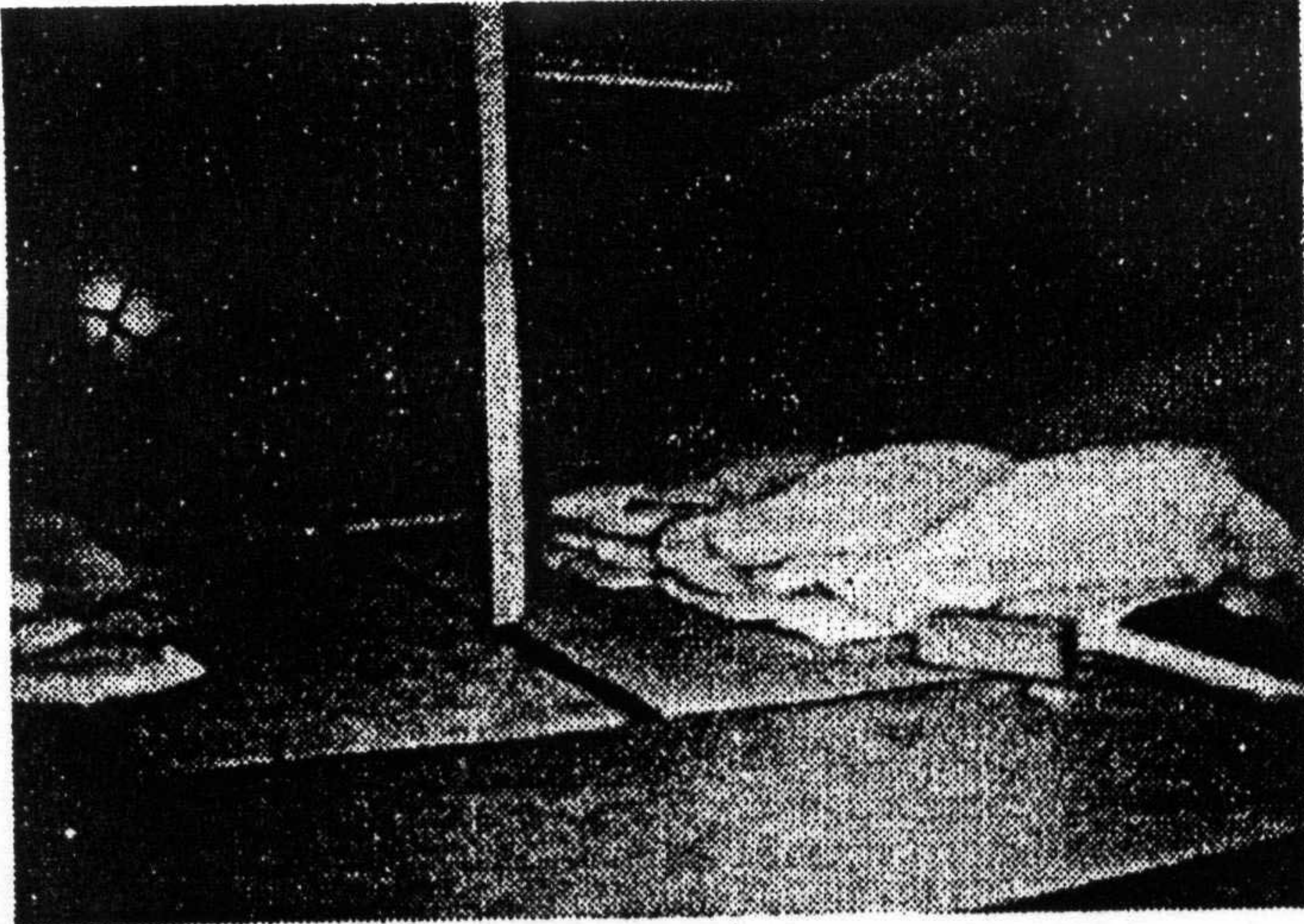
「死」は格別の関心もひかず、この病院はいわゆる老人ホケと、この病室の患者の死(うば)は(捨山

3 搾取

その前夜見た万作さんは、もう流し動食がノ下を通らず、小便のしみたふとんに寝ていた。ももひきもはいていながら足はミミラのようにこなし、とさはんの字に曲っていた。若い患者がアルミのコップにくんできた水をそのまま口に飲み、それが、末期の水になった。

死を待つばかり

それでも万作さんは、看護人に慰められた珍しい例だ。正月に死んだ勝三じいさんは、看護人がみつけたとき、カッと天井をにらみすえて、ごと切れていた。去年の



働かされる患者

病人の世話・便所掃除

でもあった。公平じいさんは内科病院にいたのに「手がかりすぎる」ので移されてきた。寮助じいさんは、奥さんが働いていて、面倒をみられないので入れられた。こんな老人たちが、不潔部

格看護人はたったの二十人(医務法に決められた人数の三分の一以下)。だから死を待つばかりの老人たちの世話は他の患者の仕事であつた。

だが、院内をよく観察してみると、そのよきなニセ看護人だけではなく、診療以外のあらゆる仕事に、正規の職員の何倍もの患者が働いていた。これでは、患者が病院運営の裏面を担当しているといった方が当たっている。

患者の担当するニセ職員の数(カッ)の数は次の通りだつた(カッコ内は正規の職員の数)。

タマネギやイモの皮をむき、配せんする係 10(4)▽ボイラーマン(1)○▽修理や土木工事、マキ割りの係 5(0)○▽玄関、事務室などの清掃係 10(1)▽シートとぶとん、毛布、マクラのカバー各四百枚(毎週)と患者の不潔の洗たくの係 10(1)▽作業療法と称する手内職を手配し、洗濯をしける係 7(1)▽

これらの使役は、ほとんどが患者側の申出を病院側が許す、という形で行われていた。

これら重要な労役を、いわば一軍として、二軍には、病院の指令による使役があつた。失禁患者の世話、汚物洗たく、病室清掃、食器洗い、便所掃除……。

そして残りの三軍は、内職と呼ばれる病院のもうけ仕事に使われた。病室が作業場となり、学童雑誌の付録づくりが始つた。ボール紙の時計の針を取付ける、ポリ袋につめる。けものアナのよきな部屋(うば)にははがる明あ、あたかた手ともの世界。そのとうとな情裏のなかで患者たちは単調な繰返しに働いた。

さからつて独房へ

そんなある日、分室で部長の高田が「みんなフロロにはついて疲れたらから、内職はかわめわ」と号令をかけた。場所から主任看護婦が飛んできた。「ついでに、この作業は患者のよき。さ、みんなさ、やめてしまふ」。さ、みんなさ、

入院案内から――

「当時は入院中のあらゆる機会を治療的に取扱い、入院生活と治療の補助、病気の克服並びにアフタケアを行なつておりました」(人物は仮名)

(大輔 一夫記者)

屋に七、八人、大部屋で不潔部屋入りを待つ老人が十人、ところが、四百人の全患者に対する有資格兼作業場の大部屋。患者は薄いふとんの中にちぢまっ

て、こおりつく夜を耐えた

「不定期刑の囚人」としては、少しでもからだを動かしたい、職と接触したい、認められたい、と願う。精神科(ひょうご)は、実だ、この巧みな仕組みによって運営されていた。

精神病棟

4 絶対者

門家に譲り渡してもらった。精神安定剤、胃薬、肝臓薬、ビタミンB剤であった。安定剤は強くて臭い独房生活を、終日うつらうつらのかたで過ごさせる効果はあった。

退院の日、私の妻が医室にたずねた。

「これから家族はどんな心構えを持ったらよろしいでしょうか」

(非常勤先生、目をパチパチさせ、考え込む)「そうですね、あまり飲むなというのしかかえって反発のもとだし……むすかしいですわね」(口頭試問で答えにつま

った生徒のように、おどおど)

「新聞で断酒会というのを読んだことがあるのですが」

(ホッと)「そうですね、そうですね、それも一つの方法です」(また無言……)

ある夜、翌日退院が決まっているアル中氏が暇探しから戻ってきた。酒くさい。仲間に得意気に報告した。

「まずバス停前の酒屋で二合ほどキューツとひっかけ、それから駅の売店でよ、また一本買ってよ……昔の仲間と一升ビンあけちまってよ」

アル中は、酒を断つよう指導する以外に治療の道がないことは、精神科のイロハである。彼が再び病院に舞戻るのは、一月とはかかるまい。(人名は仮名)

(大輔一夫記者)

ドスのきいたヤクザ口調で他の患者をふるえ上は「いい話が聞けた」とほしゃを代得する者までいた。

医療法によれば、患者四百人のこの病院には九人の常勤医師がいるはずである。それが記録の上ではどうであれ、実際の常勤は電パチ先生ただ一人であった。院長もふだんはほとんど病院にこない。

常勤医は一人だけ

入院すれば医師と患者の接触は

はるかに際になるものだが、ここでは十日に一度ほどの回診がその唯一の機会だった。何人かの患者は「面接願」を書き、それを代得する者までいた。

診療室兼看護人詰所。この部屋だけは暖かく、壁をゴキブリが走った

からせるアル中の広田が先生の前ではコチコチになって、もみ手なとして引取ってもちろこととした

「あんなの弟を口

「あんなの弟を口

ほかに屍のスタッフとして週三回の非常勤医師が三人、週一回が一人、そのうち三人は元小児科医、元産婦人科医、基礎医学畑の医師。夜の当直医は毎晩一人の割り

「かいしーん」という看護人の大部屋の患者たちは、壁を背に正座して待つ。足がしびれ始めたころ、電パチ先生が非常勤医師、看護婦ら五人を従えて登場した。

先生は、退院の決定から、電パチによるリンチまで一手に取りしきっている。いわば患者四百人のすべてをあずかる絶対者だった。

「まずバス停前の酒屋で二合ほどキューツとひっかけ、それから駅の売店でよ、また一本買ってよ……昔の仲間と一升ビンあけちまってよ」

「どうですか、調子は」

その一言をいう間に、四、五人の胸を運び過ぎる。もし声をかけられたなら、大変な光景だった。

「まあ、翌日退院が決まっているアル中氏が暇探しから戻ってきた。酒くさい。仲間に得意気に報告した。

「退院したい一心

てんかん症の光二。

「どうだね」

「ハイ、かぜもひきません。てんかんも起きませーん。邪もよく飲んでいまーす」

白髪のアル中。

私はその人たちを医師とみなす。囚人を監視する牢番(ころは)ん)の名がふさわしい。精神科治療で最も大切な生活指導は、彼らは全くやってくれなかった。その代り飲ませるだけもうけがふえる薬は、きちんとたっぷりくれた。

「あなた、こういう病院、もう何回目ですか」

「八回目です」

「何が悪いんです」

「八回目です」

「何が悪いんです」

「八回目です」

「何が悪いんです」

私は毎食時に一回くれる薬を看護婦の目を盗んで持帰り、退院後専

牢番でなく医師

患者うかがう顔色ただ



「あなた、こういう病院、もう何回目ですか」

「八回目です」

「何が悪いんです」

「八回目です」

「何が悪いんです」

「八回目です」

「何が悪いんです」

(大輔一夫記者)

棟病精神

ル末

の下に隠して持出された。浅沼が
どういう目にあつたか。

二月二十七日の回診で、浅沼は
「内臓の検査をして下さい」とい

たが、聞入れられなかった。さら
に「病院だから、みるのが当り前

じゃないでしょうか」というと、
電パチ先生は激怒。大声で「保護

室、電氣」と宣告した。
私が入院する数日前、警察から

送りこまれた浅沼はこの病院の恐
ろしさを知らな

さずきた。
その二。
アル中の宮下

は、退院の教日
前、電パチ先生
に口答えした。

彼は去年九
月、都の精神衛生センターの紹介
で入院した。退院も近い一月末

病院には内紙で
よその精神病院
へ就職を勧め

られて断られ
た。これが医師
の耳にはいつ

た。報告しな
ったのに「院内
作業(洗たく)中

止」をいい渡さ
れた。そんなも
のともとやり

たくなかった
といい返したの
が良かった。

口答えの罰は退院取消、独房十
七日。

彼が入れられた保護室には「食
事時も外に出してはならない」と

いうはり紙がしてあった。
保護室—大部屋—開放棟—退

救出を訴える手紙
白髪のアル中患者浅沼の危機を
浅沼の親族に訴えたこの手紙は、
四日退院した患者に託され、下着

三月一日

5 鎖 (くさり)

つらい退院への道

口答えひとつで取消し

院が患者の歩むコースである。こ
のコースはつらく、長い。宮下は
あつてなく、ふり出しに戻った。

その三。
入院二日目の夕方、看護婦が
「相部屋でもいいですか」とい

て、私の保護室に一人の少年を連
れて来た。色白、やさしい目、十
五歳だという。

「幸正です。よろしく」と手を
つき頭を下げた。言葉はハキハキ

としていいであった。
「ぼくは、いつまでこんなとこ
ろにいるんでしょうか」

彼は便所のアナをじっと見つめ
ながら涙をポロポロこぼした。

退院後、私は彼の両親をたず
ね、早く、くさり部屋のこと、め

の事について話をした。
「そうですか……。初めての面

会するとき、あいつは「部屋を替
えるよう頼んでくれ」と小声でい

てました。「寒いんか」って聞く
と、何度もコックリうなずくんで

す。看護人がそばにいたので、い
たいこともいえない、様子でし

た。わたしも病院を信じてます
からねえ、黙って帰ってきたんで

す。見送るほどヤせて、変だと
は思ったんだが……」

父は、こういって目をしばた
いた。母は、ア

カキの手で、
しきりに目をこ

するのだが、涙
がとまらない。

彼は、小学二
年生のとき交通

事故にあつて学
校を数週間休んだ。以来、休みぐ

せがついて、家にもりつ切り。
その彼が、最近、欲しいものがあ

ると、物を投げて、あばれるよう
になった。手を焼いた両親が「や

っぱり、あの交通事故で頭でも…
…」と心配し、福祉事務所に相談
してこの病院を紹介された。
少年と二人きりの四日間。彼は

室内アンテナを投げたりしなきゃ
よかつたんだ」と後悔した。話
相手がいらないさびしさも訴えた。

「お兄さん、きつと家に遊びに来
て下さいね」といって住所と名前
を覚えてくれた。

彼の心が求めているのは、臭い
保護室や眠り薬ではなかつた。打
ちつけて話合える友達であつた。

その四。
退院後、私はある患者の家族に
院内の実情を話して、本人を退院

させた。彼は半年も前から、回診
のとき「いつ退院してもいい」と
いわれていた。それでいて家族の

方は「容体がよくなっていませ
ん」という。先生、言葉を使
っていた。先生は、実は白衣を

新た平職員。その応接に使われる
シュータン、数きのテラックスな部
屋からは、ゴミのためのような病棟

をだれが思い浮べることができ
よう。

一七九三年、フランス革命当時
のパリ。「セートル牢獄病院
は、最も悲惨をきわめた修羅(じ

ら)場であつた。多くの極悪人
や人殺しどもが、クサリでつなが
れている。それよりもっと奥の暗

やみの中に、狂人たちの一団がつ
ながれて横たわつていた」(ビネ
ル伝・秋元波留夫訳)

医師フィリップ・ヒネルが、こ
のクサリをどうしたことか近代精
神医学は始つた。

百八十年後の日本、まだ多くの
精神障害者が見えないクサリにつ
ながれている。つないでおけばも
うかるクサリに。(人物は仮名)

お兄さんと私を呼び、人なつてく
れ礼儀正しく話しかけてきた。差入
れのチョコレートを半分わけてく
れた。「二度学校を休むと、はず

かしくって、行きたくなくなつち
やうなんです」ともいった。「バイ
クがほしくなつたとき、テレビの

患者の足もとにみえる黒いア
ナが便所。終日そこから発散
するにおい。「このにおいと、
このメシに慣れるには、ひ

と月」と患者がいう。

お兄さんと私を呼び、人なつてく
れ礼儀正しく話しかけてきた。差入
れのチョコレートを半分わけてく
れた。「二度学校を休むと、はず

かしくって、行きたくなくなつち
やうなんです」ともいった。「バイ
クがほしくなつたとき、テレビの

患者の足もとにみえる黒いア
ナが便所。終日そこから発散
するにおい。「このにおいと、
このメシに慣れるには、ひ

と月」と患者がいう。

(大編 一夫記者)

棟病精神

棟病

○月某日 ○○党の機関紙二万枚ほどを折る作業。棟病中の総力をあけて、午前中いっぱい作業した。機関紙には、都議会議員選挙の近しいことが書かれている。

6月18日 ケースワーカーのSがぶ厚い名刺とハガキ六千枚を持って病室へやって来る。「これ急ぐんだ。明日役かんしたいので、今日中によろしく帰ります。いいですね」。矛盾はだれたって感じているが、われわれは断れる立場にない。字のうまい者十数人が狩出される。履すきから夜の八時半までかかる。手首が痛い。ハガキは「投票日もせまっているので、おこし」との文面であった。

6月19日 午後三時から八時まで投票のあて名書き。十名くらいで何千枚書かされたことが、ろくに運動もさせてもらえない体には余りたえぬ。こんなに使われてタバコ二本では間尺に合わない。

6月23日 またも封筒詰め。午前中から夕方六時まで十名で働

二通りの閉病日記
アル中患者の小森は、閉病日記を付けていた。

しかし、棟病(とび)ではだして午前中から夕方六時まで十名で働

選挙異聞

めけの私物検査がある。全病棟下で「さうさう」という声で持物がひっくり返される。小森が日記を付けていることは病院側でも知っていた。だから彼は二通りの日記を付けていた。ひとつは病院向け。もうひとつは、次に紹介する本物。

彼は、これを病室の古新聞の間にたくみに隠していた。事実関係は、隣病たちの証言で裏づけられた。

のXX候補がにこり笑いかけている。病生、早くここからのがりたい。

支持者まで指定

6月25日 「医は政なり」とうくく思う。ポスター三百枚、午前中にとせかされる。大忙し。こんなに患者を動員するのは、カネもかかるまい。昼食時、Kさん

書き名あて日連

候補応援に患者を動員

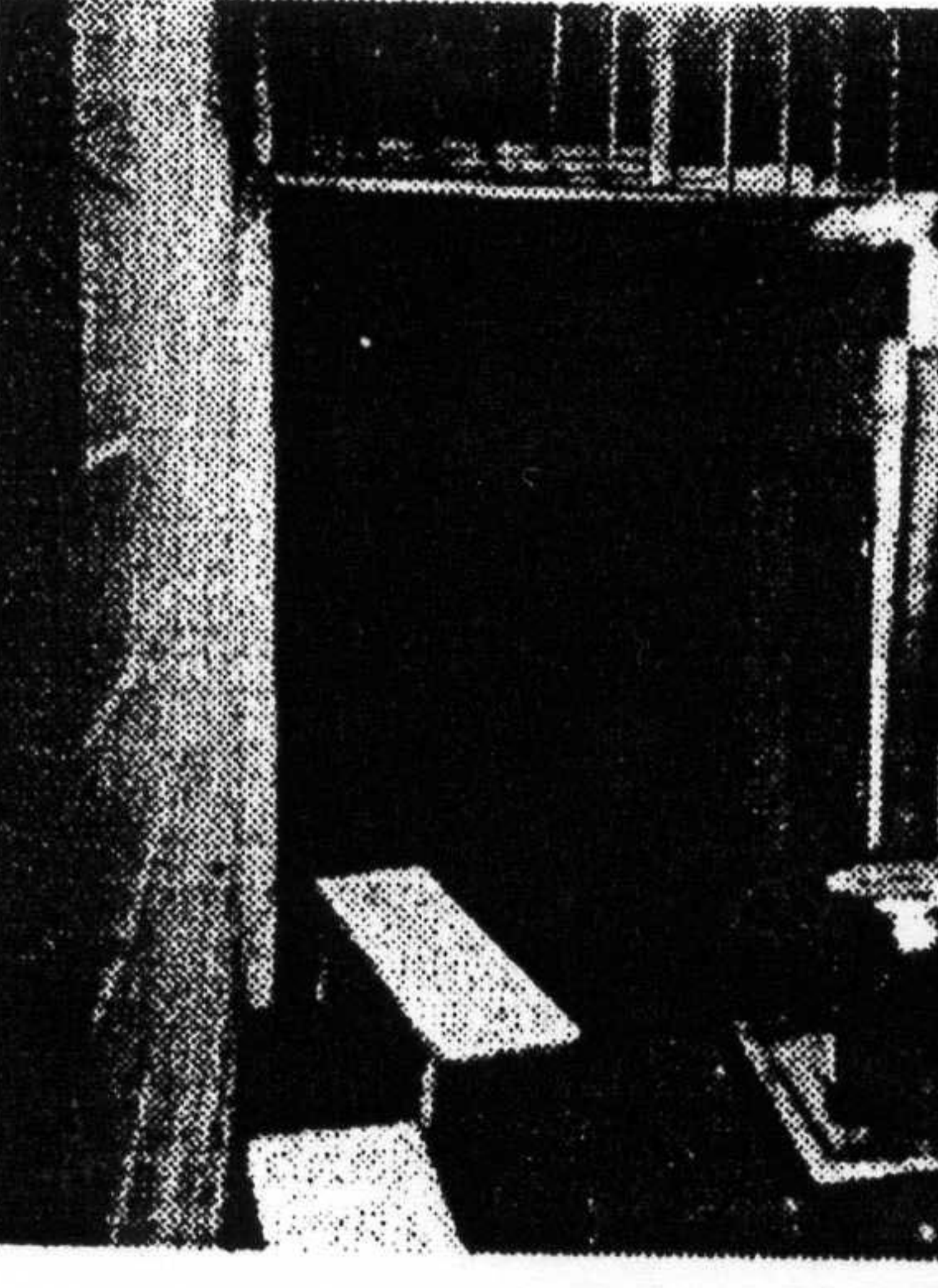
6月29日 日曜だというのが「オレたち、こんなにき使われてるんだから、当選したらもういめでも食わしてくれるかな」とうってみんなを笑わせた。最近、まためしの舞が落ちてきたと評判。

6月29日 日曜だというのが「オレたち、こんなにき使われてるんだから、当選したらもういめでも食わしてくれるかな」とうってみんなを笑わせた。最近、まためしの舞が落ちてきたと評判。

は工場である。ああ、なんたるこ人が変わったよ。いつもは人間とぞ。患者をこんな使い方する病院が、日本中にあるのか。大勢の選挙民に見せたいものである。

7月11日 今日も主任看護婦と看護婦人が詰所に投票者を呼出してた。「だれにいれるのか」「XXさんが立候補しているのを知っているか」。こんなうんざりなやり方。

7月13日 都議選投票日。投票者は廊下に並ばされた。病棟九十人のうち二十人くらいだろうか。日ごろのコシキみたいな服装は、全部きれいに着替えさせられて、折るしかない。



中央の暗やみの両側には保護室が三つずつ。このストープが患者九十人の病棟唯一の暖房。食事時間の十分間はマキが入る。

7月13日 都議選投票日。投票者は廊下に並ばされた。病棟九十人のうち二十人くらいだろうか。日ごろのコシキみたいな服装は、全部きれいに着替えさせられて、折るしかない。

れては、判断のしようがないではないか。考えれば考えれば気が高ぶってきて眠れない。

病棟が人間変える

かつて都立松沢病院の医師のグループが、精神衛生法改正問題について全国の精神科医にアンケート調査を行い、その中で「精神病院入院者の選挙権をどう扱うべきか」という質問をした。憲法に定められた権利は、精神病患者といえども自由に行使させるべきだ、との回答が多かった。

私は、この病院を退院後、比較されるある病院をたずねた。その患者たちは選挙になると五党に動きかけて各党代表の市議たちを招き、政策討論会を開くという。投票率は平均六割。その記録とたくさんスライドをみせられた。

私の来院を知って、三、四十人の患者が私を囲んだ。いいだいてとをいってもらった。医療問題の矛盾、政策の腐敗、ジャーナリズムをはじめとする社会一般の精神障害者への偏見……セキを切ったように、しかも猛然と、核心をつく議論は、患者のなかにいることを完全に忘れさせた。私自身の心にもあった偏見は完全に吹飛んだ。

あの暗い病棟にうめいていた患者の群れと、こののびやかな集団との、このへたたり。病棟の運命のしかたが患者を人間にも、動物にもするのだと思った。

あの暗い病棟にうめいていた患者の群れと、こののびやかな集団との、このへたたり。病棟の運命のしかたが患者を人間にも、動物にもするのだと思った。

棟病精神

7 置き去り

患者の仲間うちの通念である。

次の表は私が入院していた病棟(とう)での日用品代一覧表だ。ぬみがき粉120 洗顔石けん120 洗たく石けん120 トイレ紙150 洗たく代930 外はき180 新聞雑誌270 理髪料540 お茶代180 筆具用紙代120 補修費240 その他 現 合計三千三百円。(単位は円、月額)

この一覧表のいかにも、もっともらしい数字のかけにながら置かれているのか。

使わなくても紙代

理髪代は都心の理髪店でさっしりできる値段だが、実は病室で患者同士や看護人が備えつけのハサミでチョコチョコやるだけ、千円近い洗

たく代は、実は患者の無料奉仕であり、しかも石けん代は別にどうられている。ぬみがき粉は窓の空きカンに入れてあり、みんながプーシに水をつけて突込むからドロドロ。新聞は二十五人部屋に一部だけ、五、六部は入れてくれないと計算が合わない。お茶代というのは毎食時にだけ出てくる色だけの茶であり、食事代と別にかき出すしるものではない。トイレの紙百五十円は、長さにして二百円はある。毎月、十円は使う計算だが、病棟の患者たちは、ほとんど使わない。たいてい、ここは便所が

と置いていた。生活保護を受けている患者の場合、この日用品代は月二千五百円にまけてある。とはいっても固から日用品のための扶助は月三千円弱。日用品代と一日六本許されるタバコ(しんせい)代を差引くと、月四百円ほどしか残らない。生活保護は受けていないが、タバコ代にもこと欠くという患者には、医師や職員が捨てた吸い殻を、特別に無料で、一日六個配給してくれた。それが、病棟での唯一のサービスであった。

患者は一覧表を知らされていなかった。このようにハネが四百人の患者のうち、朝から晩まで行われていることをしゆ知らな

患者があった。新聞は主要紙を病棟がもち、べつに読みたいものは患者が自費し合せて買った。理教新聞と赤旗が健全に並存していた。常駐医五、有資格看護婦(士)三十一、看護助手二十四。私の病棟では、ここより患者が百人多く、スタッフは半分以下だった。しかし、この病棟は最近、膨大な赤字が重なり、院長は自分の土俵と家を売却した。もうからないことを裏証した院長はこういった。「私のところでも、とても良心的とはいえない。いまの日本では、良心的な精神医療はありえないのです。私のように良心をマクマクせるか、あるいは捨てるか、の二択しかありません」

何でもピンハネ

「法規通りでは引合わぬ」

「法規通りの運営したら、絶対にもうかるはずがな」といふのは精神病院についての医療界の通念であり、そして、もうかっている精神病院がほとんどのも同様に

が、実は病室で患者同士や看護人が備えつけのハサミでチョコチョコやるだけ、千円近い洗

学雑誌の付録へいりきつてくる病室の窓のはるか回りを、院長の乗る黒いバスが走っても、なにも言わな。一覧表がしほり取られた金がいもむしむしとここへのか、それを追いついて患者にあるはずがな。

「ここでは患者が医師や看護婦の給料まで知っていた。洗たくは、患者たちの独立採算式組織があり、ワイシャツ三十円、ネグリジエ六十円……利益は働いた者に分けられた。売店は患者が雇われ支配人であり、患者が経営責任をもつ喫茶店では、特製シソをぐと一さら四十円が好評だった。患者はコーヒをすすり音楽が流れていた。私のいた病棟では「ミタメ」から拾ったバナナの皮までしゃぶる

「疲れてはて「退院時期だ」と思った私は、面会にきた妻にワインを三回送った。この合図が出れば、妻は病院に「カネが足りないから、もうしても退院させた」と申出る手はずになっていた。

カネの切れた自費患者に病院は未練はない。入院十二日目、看護婦が退院を告げた。

ただ逃げるように

「かかったな」といって、部屋の仲間たちの顔はこわばり、笑顔になり切れないゆがみが宿っていた。なぜ、こんなに早く退院できるのか、その不審がどの顔にも浮んでいた。置き去りという言葉が私の心をかすめた。逃げるように私は病室を去り玄関を出た。

腰がかった。青空に、目まいがした。ヒサガクカクだった。ただ、ただ、ねむかった。おわり

患者好遇の結果は

退院後の話になるが、私は神奈川県下のある私立の精神病院を訪問した。すべてが、私のいた病棟

私は退院した。多くの患者とゆがんだ医療環境は、「この格子の向うに置き去りにされている

る

る